

ポポフ ニュース 17

2010年6月号 No.



ポポフ(POPOF)はポレポレ基金(Pole Pole Foundation)の略称で、1992年にコンゴ民主共和国で設立されたNGO(非政府・非営利団体)です。ポレポレとは「ぼちぼち」という意味のスワヒリ語で、あせらずゆっくりと運動の輪を広げていこうという気持ちがこめられています。

ポポフの目的は、コンゴ東部にあるカフジ・ビエガ国立公園の周辺で自然環境の保全、絶滅の危機に瀕するヒガシローランドゴリラの保護、地域振興、自然保護教育を実践することにあります。

会員はほとんど国立公園周辺に居住する地元の人々で、調査団を組織して土壌や動植物相の現状を調査したり、自然資源の持続的な利用をはかるように村人たちに呼びかけています。子供たちの年齢に合わせて環境教育のプログラムをつくり、就学前の児童から、大学生、主婦にいたるまでさまざまな教育事業を実施しています。また、国際交流を高めるために観光客に配布するパンフレットや絵はがきをつくり民芸品を販売して、地元でエコツーリズムを推進するための活動をしています。

こういったポポフの活動を支援するために、日本支部ではカフジ・ビエガ国立公園周辺の人々の生活、アート、ヒガシローランドゴリラを題材にした絵はがき、カレンダー、エコバッグを作成して販売し、展示会、講演会を開いて寄付を募り、現地で保護・教育活動や必要な物品を購入する資金にあてています。また、民芸品を作成する技術やアイデア、自然保護教育のための教材を提供したりしています。現地コンゴの政治情勢が思わしくないため日本ではまだポポフの会員を募集するまでに至っていませんが、将来日本からも人材を派遣してより国際的な活動ができるようにしていきたいと思っています。

ポポフニュースは、最近のポポフの活動を紹介し、今までに日本で集められた資金がどのような活動に使われたかを報告するニュースレターです。現地の人々やゴリラの近況についても報告していこうと思います。また、ポポフが創作したポポフ・グッズや絵はがきの販売についても紹介しますので、お知り合いで興味のある方にもぜひ伝えていただきたいと思っています。

活動報告 (2009年6月から2010年5月まで)

2009年

6月23日～28日

●ポポフ写真展「国際ゴリラ年を考える」…………… 堺町画廊(京都市)

6月27日

●その場小説「ごりら」(いしいしんじ)…………… 堺町画廊(京都市)

6月28日

●講演「ゴリラの記憶とポポフの活動」(山極寿一)…………… 堺町画廊(京都市)

7月～12月

●国際ゴリラ年写真展「ポポフの活動紹介」…………… 千葉市動物園(千葉市)

8月27日

●講演「ゴリラの記憶と共感の世界」(山極寿一)…………… 法然院夜の森の教室(京都市)

10月1日～11月30日

●国際ゴリラ年特別展「ポポフの活動紹介」…………… 神戸市王子動物園(神戸市)

11月3日

●講演「ゴリラから学ぶ人間の不思議」(山極寿一)…………… 神戸市王子動物園(神戸市)

11月14日

●講演「環境・共生・未来—ゴリラが教えてくれたこと—」山口県立大学GPフォーラム基調講演(山極寿一)… 山口県立大学(山口市)

11月14日、15日

●SAGA12シンポジウム「ポポフの活動紹介」…………… 到津の森公園(北九州市)

11月15日

●国際ゴリラ年特別講演「ゴリラの生き方に人間の由来を探索」(山極寿一)、SAGA12シンポジウム… 到津の森公園(北九州市)

11月29日

●講演「国際ゴリラ年とゴリラの保護」(山極寿一)…………… 京都市動物園(京都市)

12月8日～20日

●あべ弘士展…………… 堺町画廊(京都市)

12月16日

●ゴリラ談義(あべ弘士 X 山極寿一)…………… 堺町画廊(京都市)

1月30日

●講演「アフリカの熱帯雨林に学ぶ人と環境:ゴリラ観光の光と影」(山極寿一)、
シンポジウム「沖縄の環境保全と意思決定—一人の移動、環境・文化の関わり」…………… 沖縄県立博物館(那覇市)

3月20日～22日

●京都大学野生動物研究センター・京都市動物園連携2周年記念事業「野生動物学のすすめ」、ポポフ紹介… 京都市動物園(京都市)

5月19日、20日

●「ゴリラの子守歌」おはなし/山極寿一 詩朗読/ひらのりょうこ 新作狂言「ゴリラ楽」/茂山千三郎… 京都シネマ(京都市)

5月25日～30日

●ごりらエコバッグ展…………… 堺町画廊(京都市)

2010年

会計報告



収入		支出	
昨年度よりの繰越金	1,072,283	ニュースレター印刷費	21,000
講演会・シンポジウム カンパ	208,560	ニュースレター・ホームページ作成費	20,000
展覧会売上	80,542	ポポフグッズ材料費	314,735
作品売上寄付	150,414	郵送費	51,660
ポポフグッズ売上(現金)	218,108	ポポフへ送金	2,650,200
寄付(現金)	1,299,843	次年度へ繰越金	1,772,307
売上・寄付(郵便振替)	1,800,000		
受取利子	152		
計	4,829,902	計	4,829,902

ろうきん東海NPO団体等寄付システム、日本グレートエイプス保護基金、GRASP-JAPAN、A SEED JAPAN「ケータイゴリラ」から、寄付金をいただいています



「国際ゴリラ年」を終えて

山極寿一

昨年は、国境を越えて分布域をもつ野生動物種の保護をめざすボン条約によって、国際ゴリラ年に指定された年でした。野生のゴリラの保全活動を進めるために各国でさまざまなイベントが行われました。日本でも昨年の4月に上野動物園で国際ゴリラ年にちなんだ講演会や展示が行われたのを皮切りに、千葉市動物園、京都市動物園、神戸市王子動物園などでゴリラの写真展や講演会などが次々に開催されました。国際ゴリラ年には国際動物園水族館協会も大きな推進役となっており、日本でも動物園を中心に活動が行われました。20年前には日本の動物園に50頭を超えるゴリラがいましたが、現在ではその半分にも満たない数に減ってしまいました。この機会に、動物園で暮らしているゴリラたちの環境を改善し、何とかして子どもを産ませて数を増やそうという試みにも力が入るようになりました。おかげで、11月には上野動物園でゴリラの赤ちゃんが誕生し、お母さんのモモコの名前をとってコモコと名付けられました。寒い冬にはお母さんと二人だけで寝室にこもっていましたが、この3月には他の群れの仲間といっしょになり、すくすくと育っています。

さて、昨年の6月にはドイツのフランクフルト動物園で、国際ゴリラ年にちなんだワークショップが開かれ、ポポフの地元カフジ・ビエガ国立公園からもラダー公園長が出席しました。2種4亜種から成るゴリラの現状分析と保護へ向けての対策が話し合われ、いくつかの宣言が採択されました。それをここで紹介しておきましょう。

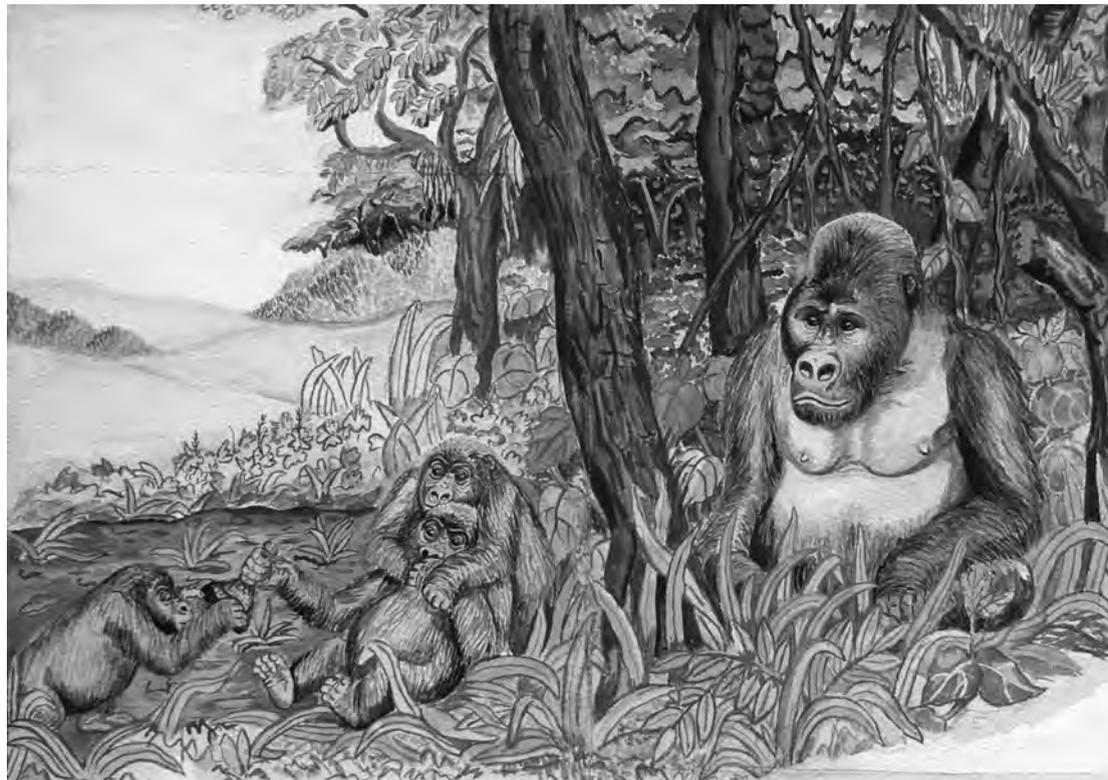
まず、ゴリラの暮しているアフリカの熱帯雨林は数億トンもの二酸化炭素を吸収し固定して、地球温暖化を防ぐ役割を果たしています。その森を維持するためにゴリラは植物の種子を運んだり、林床植生の更新を促したりして大きな貢献をしています。ゴリラを絶滅の危機に追いやめることは、熱帯林の機能を失わせて地球環境を悪化させ、私たちの暮らしを脅かすことにつながっているのです。ゴリラに直接危機をもたらしているのは密猟、伝染病、生息地の消失という3つの脅威です。それらの脅威を強めているのは、気候変動、伐採、燃料や鉱物資源の採集、畑地や牧場の拡充、ペットの取引、抗争などです。ポポフの活動するコンゴ民主共

和国では、内戦による混乱のなかでコルタンなどのレアメタルの採掘が盛んになりました。保護区で不法に採掘を続ける人々に安く銃が出回り、手っ取り早い食料として野生動物、とくにゴリラが狙われています。この10年余りの間に、ゴリラの数は半分以下に激減してしまったと推測されています。

この危機を打開するために、ゴリラの生息国においてはゴリラを保護する法律の強化を訴え、国際的な協力を広く普及することはもちろんですが、具体的には次のようなことを推進していこうと宣言しました。まず、ゴリラの密猟を止めるために、伐採や採掘、農地拡大を防ぐためのガイドラインを確立し、密猟による不法な取引に対する地域住民の意識を高め、野生動物の肉に代わるタンパク資源を開発する。各国の木材会社や鉱物会社に、ゴリラの生息域を破壊しないように活動の自粛を呼びかけ、地域住民に野生動物に代わる食料供給をするように奨励する。薪や炭に代わる燃料を供給し、なるべく燃料を節約できるかまどやストーブを普及する。ゴリラを人間や家畜からの病気感染から守るためには、ゴリラと接触する可能性の高い人々に注意を促し、できる限りゴリラの健康調査を実施する。そして、ゴリラの生息地で今なお継続中の紛争を終結させるために国連をはじめ国際的な機関に働きかけ、紛争中の勢力にも自然資源の保護の重要性を訴える。こうした活動の上に、自然資源を持続的に利用する方法の一つとしてエコツーリズムの導入と促進を図り、その利益を地元還元してゴリラと人との共生を図る。

つまり、野生のゴリラを今絶滅の危機に追いやっている主たる原因は貧困と資源をめぐる人々の間の軋轢であり、それを解決するためにすべての関係者が力を合わせ、あらゆる努力をしようという宣言なのです。ポポフはまさにその活動をこの17年にわたって行ってきたと胸を張って言えると思います。国際ゴリラ年はそれを再認識した年でした。これからますます、ポポフの活動の重要性は増していくことでしょう。

▼ダビッド・ビシムワ画





ポポフの活動

ジョン・カヘークワ



◀ポポフ環境教育学校の生徒とジョンさん

ポポフのこの1年の活動は、苗木センター、環境教育、エコツーリズムに分けることができます。ポポフの苗木センターは2つあり、ひとつはキヴ湖畔のブシュンバ村に50mX150mの区画を設けて苗木を育てています。*Eucalyptus sp.*, *Grevilla robusta*, *Markhamia lutea*, *Spatodea sp.*などが植えられており、今年の4月までに30万本の苗木を育てました。これらの苗木は近隣の村々に配られることになっています。配られた苗木をどこにどう植えて、裸になった山の斜面を緑で覆うかについては、ポポフのメンバーが村人たちに指導しています。もうひとつの苗木センターは、ポポフの環境教育学校アンガにあります。ここでも先月までに4万本の苗木を育て、両親を始め親戚や近隣の村々に配っています。苗木センターのプロジェクトは1997年に始まり、すでに200万本の苗木を育ててカフジ・ビエガ国立公園周辺の村に植えられています。国立公園内の薪採集を目的とした不法伐採は年々減っており、苗木センターの活動が功を奏していることがわかっています。村に植林することはゴリラを生息環境の悪化から救うだけでなく、人々の暮らしを改善し、地球規模の温暖化を防ぐ重要な役割を果たしているのです。

ポポフの環境教育学校は今年も活発な活動を続けて、生徒数はついに1600人を超えました。就学前の児童のクラスから、小学校、中学校、高校まであります。学校の教員や職員はかつて国立公園内で不法活動をして逮捕された人々です。職がないために公園内で不法な活動をせざるを

得なかったということで、ポポフはこれらの人々に積極的に職を与えて支援しています。教員の男女比率は女性35%、男性65%で、みな熱心に生徒たちと接しています。しかし、生徒の親たちは月に1ドルの授業料をなかなか払えず、平均して20%しか授業料を徴収できていません。ポポフ日本支部からの援助金は授業料の不足分を補い、教師や職員たちの給料、黒板や筆記用具などの購入費に充てられています。こんな苦しい経済事情の中でも生徒たちはとても熱心に勉強しています。昨年の農林部門の国家試験を受験したポポフの高校の生徒6人(女子1人、男子5人)は全員合格しました。この成績はコンゴ民主共和国中3位だそうです。1位は首都のキンシャサ、2位はキヴ州都のゴマにある高校で、都会から遠く離れた森の近くの学校でこんないい成績を出すのは前代未聞の快挙と言っていいでしょう。今後はぜひ、これらの生徒たちにポポフから奨学金を支給できるよう、呼びかけていこうと考えています。

最後は、エコツーリズムにむけての活動です。2度に及ぶ内戦で安全が保証できなくなり、すっかり観光客が遠のいてしまいましたが、最近やっとカフジ・ビエガ国立公園を訪問してヒガシローランドゴリラを見ようという人々が増え始めています。内戦前に世界中で人気を博したムシャムカ、マエシェ、ニンジャ、バララという4つのグループは大規模な密猟にあって消失してしまいましたが、今でもその子孫たちがチマヌーカ、マンコトという2つのグループを作り、ムシャムカの息子のムガルカも単独オスとして生き残っています。これらのゴリラたちは毎日訪問して観察することが可能です。そこでポポフは本年1月に、「シルバーバック王国旅行会社(SKTA: Silverback Kingdom Trekking Agency)」を設立しました。訪問客は公園でゴリラを見に行くだけでなく、村々で行われる伝統的な行事、市場などをめぐって、コンゴの地元料理(キャッサバのウガリやヤギの焼き肉、バナナビール)を楽しむという企画です。ポポフの環境教育学校アンガを訪問して、生徒たちと交流し、いっしょに苗木を植えるというスタディツアーもあります。今さまざまな旅行メニューを考えていて、少しずつ訪問客に呼びかけて試しています。近いうちに素敵なお旅行コースを紹介できると思います。日本のポポフの皆さんもぜひツアーを組んでやってきてください。大歓迎します。



▲子供たちのお昼ご飯



ケータイゴリラ、 ゴリラと出会う

羽仁カンタ

(ケータイゴリラ事務局 事務局長)

今年1月にケータイゴリラ事務局を代表して私、羽仁カンタがルワンダおよびコンゴ民主共和国を訪問して、実際のゴリラに会い、野生生物と鉱山開発関係についての現地調査を行ってきましたのでその報告をさせていただきます。

ケータイゴリラは08年の4月に立ち上げた市民のプロジェクトで、携帯電話回収とゴリラの保護を同時に行う画期的な企画です。また、最近では携帯電話や小型家電を開発作成する際に人権、環境、野生動物に配慮するエシカル携帯の開発を促すキャンペーンも開始しています。

まずケータイゴリラの説明をさせていただきます。携帯電話には何種類ものレアメタル(=希少な金属)が使われています。そのレアメタルの一つ、「タンタル」はアフリカのコンゴ民主共和国(以下コンゴ)でも一部産出されています。世界中で携帯電話が爆発的に普及していく中、レアメタルであるタンタルは需要が急増し、タンタルを採掘するために、コンゴのジャングルが次々と荒らされ、採掘に「邪魔」なゴリラが殺されてきました。その他、タンタル採掘を巡って起きた内戦に巻き込まれたり、食用として密猟されたりということも相まって、コンゴのゴリラは激減し、絶滅の危機に瀕しています。

実際に、過去・現在を含め日本の携帯電話にコンゴのタンタルが使われていたかどうかは、明らかにはなっていません。それでも、世界中で携帯電話が普及していく中で、過去にコンゴのゴリラが犠牲になってきたことはまぎれもない事実。携帯電話にはレアメタルが含まれるため、使用済みの携帯電話は業者に買い取ってもらうことができます。過去に失われたゴリラの命は取り戻せませんが、「使用済み携帯電話のリサイクル収益を保護団体に寄付することで、生き残っているゴリラを守ろう!」、そして「携帯電話を作る際に動物や人権に配慮するエシカル携帯を開発する」というのが、この「ケータイゴリラ」なのです。もちろん、寄付だけでなく携帯電話リサイクルもできて、一石二鳥。地球にもゴリラにもやさしくなれるんです。

今回の調査は、以下の4つを目的に掲げ(株)アクセンチュアの支援を受けて実施されました。

- 1 野生のゴリラに会い、ゴリラの置かれている状況を調査する。
- 2 タンタル採掘現場に行き、現場で起きていることを調

査する。

- 3 この問題に取り組む現地NGOの方にインタビューする。
- 4 ケータイゴリラ主催のゴリラ見学ツアーが実施可能か調査する。

期間は十日間でしたが日本からルワンダまでが36時間以上かかるため前後4日間は移動で取られ正味6日間でした。前半はルワンダで観光化されているマウンテンゴリラを見に行くトレッキングツアーに参加。1日56人だけに許可証が発行され、8人が一組になって7つのコースに分かれて参加することができます。コースは様々なものがあり、ぼくは一番ハードなSUSA(スサ)に参加しました。8時に車を降りてトレッキングを開始しましたが、マウンテンゴリラに会えたのは12時頃だったので、4時間も山を登ったこととなります。ぼくは軽い高山病になってしまい息が苦しく、もう日本には帰れないと思ったほど呼吸困難な状況でした。ゴリラに会えたときは自然と涙があふれ、絶滅させたくないと思うようになりました。1時間程度ゴリラが戯れるのを見て下山しました。

後半はコンゴ民主共和国です。移動も含めて3日間でしたが、ポレポレ基金のジョンやドミニクとも、ゴリラや現地の人々の状況、どのようにして問題を解決して行くべきかなど様々議論することができました。翌日は、行きは7時間、帰りは5時間も悪路を走りましたがタンタル鉱石の採掘現場に連れて行ってもらいました。約500mの深いトンネルが山の斜面にいくつもあり、懐中電灯1本でトンネルに入り、立つことはできなくおしりをついて進みましたが生き埋めになるのも怖かったので途中で断念し引き返しました。このトンネルが国立公園の中に掘られていることを想像すると長期間の滞在型採掘になり、ゴリラが食用になってしまうことも少し想像できました。

今回の調査でわかったことは、タンタル採掘の影響を受



▲タンタル鉱石の採掘現場、500mのトンネル

けているゴリラは、マウンテンゴリラや東ローランドゴリラです。マウンテンゴリラはコンゴ、ルワンダ、ウガンダ3カ国のビルンガ火山群に位置する各国の国立公園の中に生息し、東ローランドゴリラはカフジビエガ国立公園(Kahuzi-Biega National Park)に多く生息しています。

今回の現地調査でわかったことは、本来動植物が守られるために作られた国立公園の中で非合法に行われている採掘によって、直接殺され食用になったり、すみかである森林が減る事でゴリラたちは日々生活を脅かされていることがわかりました。本来動物が守られるべき国立公園の中でそんなことが起きていたなんて衝撃的でした。それだけではありません。国立公園の中ではタンタル採掘を巡る紛争に巻き込まれたり、動物園に売る事を目的とした密猟もまたゴリラに追い討ちをかけています。世界でのマウンテンゴリラの生息数は残り約700頭、東ローランドゴリラは5,000頭を切っていると言われていきます(2009年時点)。

今手元にあるいらなくなった携帯電話をケータイゴリラ事務局に提供して、一刻も早くゴリラの保護に参加しましょう。ただいま4つ回収方法を提案しています。

1) 回収キットをケータイゴリラ事務局から借りて、知人友人などから回収する。

自分たちで使用済み携帯を回収して、一台一台穴を開けて回収できます。

2) ジングルボックスでの回収

常設置型の使用済み携帯電話の回収箱をお店など多くの人が訪れる場所に設置して回収する事ができます。(2010年は都内で設置実験中、京都の堺町画廊にも設置しました)

3) 法人一括回収

会社や団体で一括契約している携帯電話の更新の際に出る大量の使用済み携帯電話を一括で回収する仕組みです。個人情報漏洩防止のための立ち会いもお願いしています。

4) ケータイゴリラ事務局の出張出店

(解体ショー込み)

ケータイゴリラ事務局が出店して、携帯電話をブースなどで回収できます。回収した携帯電話を分解して、中の貴金属などをお見せすることができます。

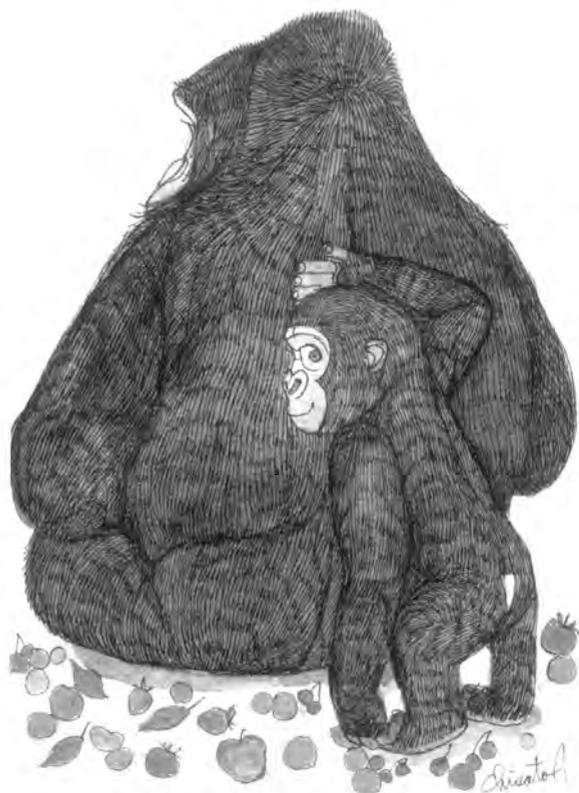
今年の9月後半には都内で、ポレポレ基金のドミニクを招いてのシンポジウムの開催を目指しています。詳しくは、ケータイゴリラ事務局のホームページを見て下さい。
http://www.gomizero.org/ketai_gorilla/index.html



ゴリラたちの近況

山極寿一

大変残念なことに、去年は2頭のシルバーバックが相次いで亡くなりました。3月26日にムファンザーラが肝臓にできた腫瘍が原因で、そして5月30日にはピリンドウワが亡くなりました。ピリンドウワの死因は確かめられていませんが、殺害されたわけではなく、自然死だったようです。問題は残されたメスや子どもたちです。これまでヴィルンガ火山群に生息するマウンテンゴリラでは、リーダーのシルバーバックが死んだ後にメスや子どもたちばかりが残されると、他のグループのオスやヒトリオスに乳児を殺されてしまうことが知られています。カフジではリーダーが死んでも、メスや子どもたちだけで何カ月も集団を維持した例があります。マエシエが死んだ後は29カ月、ニンジャが死んだ後は10カ月も成熟したオスを欠いたまま、メスたちは集団生活を送ったのです。それらの集団が新しいオスを受け入れたときも、子殺しは起きませんでした。新しいリーダーは子どもたちをまるで自分の子どものように大切に保護したのです。



阿部知曉画

ところが、チマヌーカだけは違いました。チマヌーカはマエシエの息子で、マエシエの死後はヒトリオスとして暮らしていました。17歳のときに2頭のメスを得て自



▲チマヌーカ：撮影 Dominique Bikaba.

分の集団をつくると、やがて近隣の集団からたくさんのメスが加入するようになりました。そして、2004年にムガルカの集団と衝突したとき、チマヌーカは1頭のメスが抱いていた赤ん坊を奪って殺したのです。これはカフジで初めて観察された子殺しでした。続いてチマヌーカは、加入してきたばかりの2頭のメスが産んだ子どもを殺し、その事件の後にチマヌーカのもとへ移籍したメスは、子どもを元いた集団に残したことが発覚しました。おそらくこのメスは自分の子どもが子殺しに合うのを避けようとしたのだらうと思われま

す。うれしいことに、ムファンザーラの死後に子殺しは起きていません。この集団には赤ん坊が5頭、離乳した子どもが1頭いたのですが、子殺しが起きたという報告はありません。ただ、8頭いたメスたちが互いに別れて遊動し始め、まとまりを欠くようになっていきます。若者のオスが1頭いますが、とてもムファンザーラに代わってリーダーになるほどの力はありません。おそらく、近いうちにメスたちはばらばらになって、成熟したオスのいるグループへ移籍していくでしょう。

ビリンドウワのグループには、ビリンドウワの死後すぐに若いシルバーバックが加入しました。このときも子殺しは起きなかったようです。ビリンドウワのグループには赤ん坊が1頭いましたが、元気であると報告しています。ただ、新しいリーダーがビリンドウワのように人に馴れてい

ないため、公園の職員たちに会うとメスたちを追い立てて人から遠ざかるうとします。近くで観察するのは難しくなりました。

現在、毎日のように観察できているのは、チマヌーカとマンコトの2集団、それにヒトリオスになったムガルカです。チマヌーカは17頭のメスと15頭の子もたちを有する33頭の大きな集団になりました。チマヌーカのグループでは、2004年、2005年、2007年と3回も続けて双子が生まれています。こんなに双子が生まれるのは今まで例がなく、ひょっとしたらチマヌーカには双子をつくる特別な能力があるのかもしれませんが。そのうち2組が生き残っており、グループの人気者になっています。将来が楽しみです。マンコトのグループもだんだん人に馴れてきて、もうあまり観光客が近づくの気にしなくなりました。このグループにもメスがが多く、近い将来たくさんの子もが生まれることが期待されています。研究目的で人付けしているガニヤムルメのグループと同様、まだリーダーのオスが若くて頼りないのですが、何とかグループを率いてメスたちに頼られるシルバーバックに成長してほしいと思います。



▲みんなでグルーミング：撮影 森啓子

▼カフジ・ビエガ国立公園でモニターされているゴリラ集団の現在の構成

集団名	シルバーバック	ブラックバック	オトナメス	ワカモノ	コードモ	アカンボウ	合計
	13歳以上	8-12歳	8歳以上	6-8歳	3-6歳	0-3歳	
ムガルカ	1						1
チマヌーカ	1		17		5	10	33
ビリンドウワ	1		3		3	1	8
ムファンザーラ		1	8	3	2	4	18
ランガ	1		5		1		7
ムブングウェ	1		6				7
ガニヤムルメ	1		8		2	2	13
マンコト	1		12	1		2	16
無名	1	1	10			3	15
合計	8	2	69	4	13	22	118



▲バサボセさんとモニタリングチーム

近刊案内

- 総合人間学会編
『戦争を総合人間学から考える』 学文社
- 米川正子著
『世界最悪の紛争「コンゴ」-平和以外に何でもある国-』 創成社新書
- デズモンド・モリス、スティーブ・パーカー著、藤井留美訳・山極寿一監修
『類人猿-最新研究が明かす生態と未来』 日経ナショナルジオグラフィック社
- 京都文化会議記念出版編集委員会編
『こここの謎 kokoroの未来』 京都大学学術出版会
- 小長谷由紀・山極寿一編
『日高敏隆の口説き文句』 岩波書店
- 京都大学霊長類研究所編
『新しい霊長類学-人を深く知るための100問100答』 講談社ブルーバックス
- 杉山幸丸著
『私の歩んだ霊長類学』 はる書房
- フランス・ドウ・ヴァール著、柴田裕之訳
『共感の時代へ:動物行動学が教えてくれること』 紀伊国屋書店
- リチャード・ランガム著、依田卓巳訳
『火の賜物-ヒトは料理で進化した』 NTT出版
- 亀井伸孝著『森の小さなくハンターたち』 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
- いしいしんじ著
『熊にみえて熊じゃない』 マガジンハウス
- 神沢利子・作、あべ弘士・絵
『ゴリラのこぼちゃん』 ポポラ社
- 河合雅雄・文、あべ弘士・絵
『人間』 大月書店
- 早石周平・渡久地健編 聞き書き・島的生活誌④
『海と山の恵み 沖縄島のくらし2』 ボーダーインク
- 四手井綱英著
『森林はモリやハヤシではない-私の森林論』ナカニシヤ出版
- 末原達郎著
『文化としての農業 文明としての食料』 人文書館
- 今村薫著
『砂漠に生きる女たち-カラハリ狩猟採集民の日常と儀礼』 どうぶつ社
- 松田素二著
『日常人類学宣言-生活世界の深層へ/から』 世界思想社
- 木村大治・中村美知夫・高梨克也編
『インタラクシヨンの境界と接続』 昭和堂
- 木村大治・北西功一編
『森棲みの生態誌-アフリカ熱帯林の人・自然・歴史I』 京都大学学術出版会
- 木村大治・北西功一編
『森棲みの社会誌-アフリカ熱帯林の人・自然・歴史II』 京都大学学術出版会
- 河合香吏編 『集団-人間社会の進化』 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
- 池谷和信編
『日本列島の野生生物と人』 世界思想社
- 池谷和信編著
『地球環境史からの問い-ヒトと自然の共生とは何か』 岩波書店
- 鹿児島大学鹿児島環境研究会編
『鹿児島環境学①』 南方新社
- 鎌田東二編著
『モノ学の冒険』 創元社
- 鎌田東二著
『神と仏の出逢つ国』 角川選書

ポポフのホームページ

お願い:

ポポフの紹介とポポフ・グッズの展示・販売を各地で行いたく思っています。可能な場所と展示を引き受けてくださる方があれば、ご連絡下さい。

HYPERLINK

<http://jinrui.zool.kyoto-u.ac.jp/Popof/index.htm>

ポポフの活動紹介、カフジ・ビエガ国立公園、ヒガシローランドゴリラ、ポポフ・グッズなどがカラー写真で紹介されている他、今までのニュースレターがすべて閲覧できます。ゴリラの歩く姿がとってもユニークですよ。ポポフのアーティスト、デヴィッド・ビシムワが製作した絵ハガキも通信販売しています。ぜひ、一度ご覧下さい。

連絡先: 〒606-8502 京都市左京区北白川追分町

京都大学大学院理学研究科人類進化論研究室 ポポフ日本支部

お知らせ

ポポフの英語版ウェブサイトを開設しました 河辺智弘 (ポポフ英語版ホームページ担当)

ポポフの活動をより広く世界の人々に知ってもらうために、英語版のウェブサイトを開設しました。ポポフのこれまでの歩みや現在の活動の様子、スタッフ、カフジ・ビエガ国立公園、ゴリラなどについて情報を発信していきます。また、このウェブサイトと並行してブログも開設しました。こちらではポポフの活動だけでなく、国立公園周辺の村や町に住む人々の息遣いが聞こえてくるような、日常的な出来事を記事にして載せていきたいと考えています。海外のお知り合いなどにご紹介いただければ幸いです。

ウェブサイト: <http://www.polepolefoundation.org/>

ブログ: <http://www.blog.polepolefoundation.org/>



ポポフ・グッズ通信販売のお知らせ

ポポフ日本支部では、ポポフの会員が作成したポポフ・グッズを販売して、その売り上げを現地の活動資金に寄付しています。ご協力いただける方は、郵便局で青色の振り込み用紙に 口座番号: 00810-1-90217、加入者名:ポレポレ基金、と記入した上で、ご希望の品名を書き込み、該当する金額をお振り込み下さい。折り返し、グッズをお送りいたします。★は新製品です。

☆ポポフ絵はがきセット(10枚組)	1000円
☆ビチブ・ムフンブーカ絵はがきセット(5枚組)	600円
☆ヒガシローランドゴリラ・ペンダント	2200円
☆ヒガシローランドゴリラ・キーホルダー	2200円
☆ポポフペンダント	1200円
☆どこでもゴリラ・ブローチ(木彫り)	3000円
☆ケイタイ・ストラップ(ポポフ)	1200円
★ポポフエコバック	1500円
★ポポフ2011年カレンダー(予約販売11月頃配布)	1000円

2011年
ポポフカレンダーを作ります。

200部限定
見開きA4サイズ
1部1000円(送料込み)
発売開始 11月

ゴリラの写真や絵がいっぱい!!

予約を受け付けます。
ポポフグッズと同様、
郵便振替でお申込下さい。



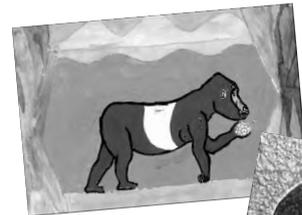
◀ケイタイ・ストラップ(ポポフ)



◀東ロランドゴリラ・ペンダント・キーホルダー



◀どこでもゴリラ・ブローチ(木彫り)



▲ビチブ・ムフンブーカ絵はがきセット



▲ポポフ絵はがきセット

絵本『ゴリラとあかいぼうし』の読み方と歌のCD販売について



ダビッド・ビシムワさんの絵による絵本『ゴリラとあかいぼうし』(福音館書店)は、ゴリラの言葉がゴリラ語に近づけた発音のカタカナで書いてあります。このため、読み聞かせをするときに、「どうやって発音したらいいの?」と困る方がたくさんいらっしゃるようになりました。そこで、なるべくゴリラに近い発音で読んだ声をCDに録音しました。さらに本の末尾に載せてある「ゴリラとあそぼう」という歌を声とバックミュージックだけのカラオケ調の2種類で録音してあります。このCDを作成費と郵送料、それにポポフへのカンパ代500円を含め1000円で販売します。ご希望の方はポポフ・グッズと同じ要領でご注文ください。折り返しCDを郵送させていただきます。

ブリッコッコ(タラコー)とカメ

昔々、タラコーとカメは仲の良い友達でした。でも、気位の高いタラコーは美しい羽を広げて滑空することが自慢で、いつも地面をはい回っているカメをばかにしていました。ある時、タラコーはカメに向かって、「カメ君、カメ君、君はいつものろろろ地面をはいつくばって歩いているから、この世界のことはなにも知らないだろう。それに引きかえ、ぼくはいつも山から山へ飛び回って、この世のあらゆることをこの目に収めているんだよ」と自慢を始めました。するとカメはむっとして「とんでもない。こう見えてもぼくは足が速いんだ。山から山へ飛び回ることだってたやすいもんだ。君に負けはしないよ」といい返したのです。タラコーはあきれて、「だめだめ、負け惜しみをいっても、君の短い足でどうやってぼくに勝てるっていうんだい。それに、そんな重そうな甲らを背負っていちゃあ、あの山にだっていき着けやしないよ」とからかいながら、近くの山を指さしました。「タラコー君、そんなにぼくをばかにしたらあとで大恥をかくよ。ぼくだったら、君が半分も飛ばないうちにあの山に着いてみせるさ」カメも負けはしません。こうなるとはタラコーもあとには引けません。「よし、それならここから向こうの山の頂上までどちらが速いか、ひとつ競争してみようじゃないか」「いいとも、じゃあ明日の朝いちばんに太陽が出たら出発だ」とうとう双方ゆずらずに、タラコーとカメは足比べをすることになったのです。タラコーは巣に帰って美しい羽を念入りにつくろい、明日は強情なカメにひと泡ふかせてやろうと意気込んで眠りにつきました。

一方、カメは何百という自分の子供たちを呼び集めると、「さあ、これからお父さんのいうことをよく聞きなさい」といって、子供たちを見回しました。カメの子供たちは、みんなよく似ていて見分けがつきません。でも、みんな真剣な顔をして聞き耳を立てています。「これはわたしたちカメの誇りをかけた闘いだ。あの高慢ちきなタラコーをこらしめてやろうと思う。みんなこれから出発して、明日の朝まだ暗いうちに一人ずつ山という山のとっぺんに登りなさい」と申しわたし、小さい声で何ごとかをいい含めたのです。

翌朝、ジャングルに陽の光がキラリと射し込むのを確かめると、タラコーとカメは森でいちばん大きな木の根元で落ちいました。「カメ君、今からでも遅くはないよ。君が一言あやまれば、昨日のことは水に流して



あげよう」「なにになにタラコー君、君がいい過ぎだったと反省するなら、ぼくだって君に恥をかかせるようなことはしないがね」

二人とも負けてはいません。よういどん。二人は出発しました。タラコーはゆうゆうと羽を広げ、一気に山の頂上まで舞い上がりました。ところが、カメはもそもそと手足を動かしたかと思うと、そばに生えていた大きなキノコの陰にかくれてゴロリと横になってしまったのです。大空に駆け上がったタラコーは、頂上をすばやくひとめぐりすると、「ブルッ、コッコ。さあ、やってきたぞ」とたからかに呼びかけました。自分の飛翔力に自信をもっているタラコーは、「カメの奴め、まだ山のふもとでふうふううっていることだろう」とつぶやくと、羽を休める木を探しました。

ところが、その時です。山の頂上で待機していたカメの子供が、「なんだ、今頃やってきたのか。ぼくはもうとっくに着いているぞ!」と大声で叫んだのです。タラコーは飛び上がるほど驚いて、「ええい、しまった。油断をしてのんびり飛びすぎたか」と羽をかきむしり、首をうち振って悪態をつきはじめました。でも、くやくしてくやくして、このままでは収まりがつきません。すぐさま、きびすを返すと、「もう一度勝負だ! 今度はあの山まで競争するぞ」そういい放つと、ものすごい速さで舞い上がりました。そして、隣の山の頂上へ着くとすばやく、「ブルッ、コッコ」と叫んだのです。しかし、この山にもカメの子供が待ちかまえていました。カメの子供は、またしても大声で、「遅い遅い、ぼくはとっくに着いているよ」と叫び返したのです。タラコーは気が違いそうになりながら、「だめだ、だめだ、まだ勝負はついていない。もう一度だ!」そういうと、また別の山めがけて舞い上がりました。

でも、山という山の頂上には必ずカメの子供が待ちかまえていて、「ぼくはもう着いているっぞ!」と高らかに勝利を宣言するのです。かわいそうに、タラコーはとうとうカメより先に山へ到着することができませんでした。

でも、あきらめきれないタラコーは、今でも山の頂上へ着くと必ず、「ブルッ、コッコ」と叫んで、カメがいなくなどうかを確かめます。そして、タラコーをまんまとだましたカメは、嘘がばれることを恐れて、いつもキノコの陰に隠れて暮らすようになったのです。

訳：山極寿一 絵：ふしはらのじこ

9月14日～20日 ●世界の霊長類絵本展 堺町画郎 (京都市)

第23回国際霊長類学会同時開催 (京都大学)

9月20日 ●アフリカの昔話「コンゴとガボンの森のお話」 堺町画郎 (京都市)

ポポフからジョンさん、ドミニクさん、バサボセさん出演

11月13日～14日 ●第14回サガシンポジウム

ポポフの紹介とグッズ販売を予定しています。

麻布大学 (相模原市)・ズーラシア (横浜市)

12月14日～23日 ●あべ弘土展 堺町画郎 (京都市)

催しのご案内